督のとのに似たる女房だにもなかりけり、空しう歸り參りたらんは、參らざらんより中々惡かるべし、是よりいづちへも迷ひ行ばやとは思へどもいづくか王地ならぬ、身をかくすべき宿もなし、いかゞせんとあんじわづらふ、誠や法輪は程近ければ、月の光にさそはれて參り給へる事もやと、そなたへ向ひてぞあくがれける、龜山のあたり近く松のあるかたに、幽に琴ぞ聞えける、峯の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音か、覺束なくは思へども、駒をはやめて行程に、かた折戸ゑたる內に琴をぞ引すまされたる、ひかへて是を聞ければ、少もまがふべうもなく、小督のとの丶つまをとなり、樂は何ぞと聞ければ、夫を想てこふとよむ想夫戀といふ樂なりけり、仲國されば こそ、君の御事思ひ出參らせて、樂こそ多けれ、此がくをひき給ふ事のやさしさよと思ひ、こしよりやうでうぬきいだし、ちつとならひて門をほと〳〵とたゝけば、琴をばひきやみ給ひぬ、是は內裏より仲國が御使に參りて候、あけさせ給へとてたゝけども〳〵、とがむるものもなかりけり、漸あつて內より人の出るおと玄けり、うれしう思ひて待つ所に、ぢやうをはづし、門をほそめにあけ、いたいけしたる小女房のかほばかりさし出て、是はさやうに內裏より御使なぞ給はるべき所でも侍らはず、若かぞたがへてぞ侍らふらんといひければ、仲國へんじせば、門たてられ、ぢやうさゝれなんずとやおもひけん、せひなく押あけてぞ入にける、つま戸の際なるえんに居て、何とてかやうの所に御わたり候やらん、君は御ゆゑに思召玄づまを給ひて、御命も既に危くこそ見えさせまし〳〵候へ、かやうに申さばうはのそらとや覺召れ候らん、御書を賜りて候とて取出て奉る、ありつる女房とりついで、小督のとのにぞ參らせける、是をあけて見給ふに、誠に君の御書にてぞありける、頓て御返書かいて引むすび、女房の裝束一かさねそへてぞ出されたる、仲國御返事のうへは、とかう申に及び候はねども、別の御使にても候はゞこそ、直の御返事うけ給はちでは、爭か歸り參り候べきと申ければ、小督のとのげにもとや思れけん、みづから返事し